Osaka University Knowledge Archive

Title	<海外デザイン研究誌紹介>October
Author(s)	市川, 靖史
Citation	デザイン理論. 1993, 32, p. 125-126
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52871
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

October —— art/theory/criticism/politics ——

1970・80年代のアメリカ美術界を通じて見られる特徴の一つは，作品やその制作動機が写真やテレビジョン放送等の映像メディアとの積極的な関わりを前提としている点である。現在，ポスト・モダニズムの芸術として位置づけられているこれらの，手法においてもモチーフにおいても伝統的な美術のそれとは異なる制作行為は，同時に，かつての芸術理念に対する批評行為としても機能すると考えられる。故にこの時代の状況を見るとき，作家の実践を思想的に支持し，ときには先導的な役割を果たした批評家たちの活動が重要視されることになる。MIT プレスから出版されている季刊の学術誌『*OCTOBER*』は1976年に創刊されて以来，これらポスト・モダニズムの美術をとりあげた論文を多く掲載し，この分野における批評言説の中心的な役割をなすものの一つであるといえる。特に，編集にも関わるロザリンド・クラウス Rosalind Krauss，ダグラス・クリンプ Douglas Crimp，ハル・フォスター Hal Foster らは，フランスのポスト構造主義を基調とするバルト，デリダ，ボードリヤールのテクストを援用しつつ，作家や作品を具体的にとりあげ，それをモダニズムの理念に対する局所的な異議申し立てとして規定する作業を続けている。 例えばクラウスは“A Note on Photography and the Simulacral”と題した論文で，写真が芸術に及ぼす影響について分析する。カメラは構造上，現実にあるものを忠実に再現する属性を有しており，あるいは一枚のネガからは複数の，同じ写真が生産され得る。この写真の性格が，芸術の価値観を変える働きをするとクラウスは述べる。つまり作品は唯一無二であり，そこには作者の独自性が認められなければならないとするモダニズムの芸術理念は，写真の複製性によって茶化しを受けるというのである。その具体例としてシンディ・シャーマンの写真作品がとりあげられる。映画やＴＶドラマの１シーンを模して撮られたその作品は，無数に繰り返される紋切り型のコピーでしかなく，作者のオリジナリティとは無縁である。さらにこの，オリジナリティ重視の理念との決別は，シャーマン自身が被写体になっていることによってより徹底するというのである。（*OCTOBER* 31/Winter 1984）

この他に写真と現代美術の関係を論じた代表的なものにクリンプの“The Photographic Activity of Postmodernism”（*OCTOBER* 15/Winter 1980）があり，いずれも近年の美術動向をめぐる言説において，多く典拠にされているものである。

本稿の筆者にとっては，こうした写真と現代美術に関する論考が『*OCTOBER*』に対する主な興味であるが，本誌はそれ以外にも建築やデザイン等，広く芸術，美学に関わるテーマを扱っており，また論文だけでなく，例えば写真家の作品を掲載することもある。また1986年には，創刊以後10年間の刊行の中から主要な論文を集めたアンソロジー『*OCTOBER*, The First Decade』がアネット・マイケルソン Annette Michelson，ジョアン・コプジェック

Joan Copjec，クリンプ，クラウスの4人の編集によって出版されており，本誌の性格を知る手掛かりとしても適当なものである。その序文によると，編集者は，まず前提として，約半世紀前（1920年代）に構造主義が掲げ，かつ未だ達成されていない課題が，今日の美学の探究において大きな重要性を持つとした上で，次の様に記す。「私たちが明らかにしようとしていることは，モダニズムの規範――それは形態やカテゴリーを明確に定義し，説明した――が，あらゆる局面において疑問視されるようになった時期にみられる特徴的な事象についてである。」美術の世界においては，こうした価値観の変化はネオ・ダダやポップ・アートを通じて現われるとされるが，序文では，前掲の引用部に続いて，これら60年代から継続している様々な試みを提示し，入念に分析するための討論の場として『*OCTOBER*』の役割を規定している。それと同時に，こうしたテーマを包括的に扱うため，より多岐にわたる分野を考察しようとしていることも，本誌の性格の一つとして挙げられている。具体的には，先行する時代の著作（例えばエイゼンシュテインの覚書）を紹介したり，同じ関心を共有する多分野の批評家に執筆を委託したり，前に触れたように，海外，とりわけフランスの新しい著作を翻訳，紹介（創刊号に掲載されたミシェル・フーコーのマグリット論など）している。こうした柔軟な編集方針は，各号の内容に応じて編集者が入れ替わることにも現われている。

今まで見てきたように，『*OCTOBER*』は美学を主軸とした学術誌であるが，それが主に扱う現代美術は，大衆文化や資本主義機構など，他分野の属性との関わりをますます深めているといえる。その点において，芸術のみならずデザインの研究者にとっても，本誌の有用性は大きいといえるであろう。ちなみにこの雑誌名は，エイゼンシュテインがロシア革命を賛美して，その10年後（1927年）に作った映画のタイトルからとられたものである。

参考までに最新号（*OCTOBER* 64/Spring 1993）の目次を紹介しておく。

Denis Hollier “While the City Sleeps”
Scott Durham “From Magritte to Klossowski: The Simulacrum, between Painting and Narrative”
Thomas Struth “Photographs from Germany, East”
Mikhail Yampolsky “Voice Devoured: Artaud and Borges on Dubbing”
Mary Helen Kolisnyk “Surrealism, Surrepetition: Artaud’s Doubles”
Vincent Kaufmann “Life by the Letter”

市川靖史　京都工芸繊維大学
大学院博士後期課程学生